

[論文]

『論考』から『探究』へ

山口拓夢

1. 哲学的省察

ウィトゲンシュタインは、『論考』で、論理哲学者なら誰でも認めるほどの仕事を成し遂げた。それは、「写像理論」と呼ばれるものだ。

記述できる対象があり、その対象のまとまりが、事態である。ひとは、この対象や、事態を文として、記述できる。いわば、ことばは世界を写し取ることができる。そう論考は説いた。事態の成立と不成立は、その文が、現実と照らし合わせて、真か偽かで写し取れる。言ってみれば、ことばは、世界を写像する、論理絵を描くことができる。真なる文をすべて枚挙することができれば、この世界は完全に写し取ることができる。けれども、現実と照らし合わせて、真か偽か判断できないような事柄、神がいるか、とか魂は不死か、というように、伝統的に形而上学が扱ってきたような問題は、世界の写像の埒外にある。この点で、ウィトゲンシュタインは、哲学の諸問題は片付いたと考えた。そこで、神秘とか価値のように、写像理論の埒外にあるものについては、沈黙すべきだとした。これが、有名な、「語り得ないものについては、沈黙しなければならない」という一文の意味するところである。

この『論考』の草稿を第一次世界大戦中、志願兵として戦場に赴きながら、ノートの片側に書き綴っていた彼は、もう片側に、ウィトゲンシュタイン『秘密の日記』として知られる独白を書き残していた。この当時、彼はトルストイのまとめた『福音書要諦』（邦題は『トルストイ 聖書』）という本を熱心に読み耽って、心を打たれていた。この本を彼が鵜呑みにしたとは信じがたいが、人にも宿る神の「霊性」に従って、誠実に生きる、

という趣旨には感銘を受け、生涯、一介の生活人として、内なる靈性に基づいて生きる、という実践を切望して止まなかった。

だから、『論考』を書き上げてしまうと、田舎の小学校の教師となって、希望に燃えて、個性的な教育に励んだ。ただ、彼は癪癢持ちであり、生徒に体罰を課することが時折あり、生徒の親たちに訴えられて、精神鑑定を受けたこともある。このように、初等教育者としては、問題のある彼であったが、子どもが引き易い語順で作成した辞書もあり、これは後年、出版されて好評を博した。

そのような彼であるが、一旦は片付いたとした『論考』に自問するところがあったのであろう。1929年月上旬から、30年7月中旬まで、『哲学的省察』という形で、ウィトゲンシュタインは、『論考』の検証を書き綴った。自らの「写像理論」を、具体的な例を挙げて、一つ一つ再考することを行ったのである。

『哲学的省察』の始まりは、こうである。

「1 文は、その文法が完全に明らかにされている時、完全に論理的に分析されている。たとえそれがどのような表現様式で書き記されたり、言い表されたりしていようとも。(『哲学的省察』奥雅博訳 p.53)」

すなわち、ここで彼は、論理は文法に内在している、と表明している。文法がめちゃくちゃでは、論理は破綻する。適切な文法で語られ、書かれることで、論理の場所が確保される。

これに続く説明で、彼がフッサールの言う意味での「現象学」に言及しているのは、注目に値する。

「我々の言語において描出にとって本質的なものは何であり、非本質的なものは何であるかの認識、又、我々の言語のどの部分が空回りする車輪であるかの認識は、現象学的言語の構成に通じるのである。(同書 p.51-52)」

ここで彼が言語による「描出」と呼んでいるのは、ことばで世界の写像を描き出すことを指している。つまり世界の「論理絵」を描き出すために、何が必要で、何が不要か、すなわち、神は存在するか、のように空回

りする車輪をどう取り除くかを考えるときに、既成の先入見をエポケーし、すなわち括弧に入れて捨象して、純粹に語り得るものを選び取るという、現象学的方法と、自分の写像理論は矛盾しない、という見解をここでははっきりと明示しているのである。

また、彼は、哲学とは整理整頓であり、散らかった部屋を片付け、もつれた糸を解きほぐす作業であるという見方を、改めて示している。

「何故哲学はかくも複雑で錯綜しているのか。哲学は完全に単純でなければならないはずなのに。―哲学は、愚かにも我々が巻き込まれた思考のもつれを解きほぐすのであるが、しかしこのためにはそのもつれと同じだけの複雑で錯綜した運動を行わなければならない。従って哲学の結果が単純であるにせよ、結果に至る方法は単純ではありえない。

哲学が複雑で錯綜しているのは、その素材が複雑で錯綜しているからではなく、我々のもつれてしまった悟性が複雑で錯綜しているからである。（同書 p.53）」

真か偽か決められない問題と格闘する、形而上学の、思考の車輪の空回りを、彼はここでも念頭に置いている。それを、複雑に絡まった糸を解きほぐすという、具体的なイメージで思い起こさせるのが、ウィトゲンシュタインらしい個性的なところである。

彼はまた、言語成立の基本に立ち返って、ことばと理解について考え直している。

「5 言語表現の任意性。次のように言えるだろうか。即ち、子供はある特定の言語を話すことを学ばねばならないものの、その言語で考えることを学ぶ必要はない、つまり、子供は何らかの言語を学ぶことなしにも自ずと考えるであろうから、と。

しかし私の言わんとするのは、子供が考える時彼はたしかに心の中に像を描くということであるが、この像は或る意味で任意である。即ち、他の像を以てしても同じ働きが果たされうる限りにおいて任意である。そして他方からみれば、言語自体も又、自然に発生したもので

ある。つまり、話し言葉で、ある特定の思想を表現した最初の人間がきつと存在したに相違ない。だが、それはそうと、全体はいずれでも変わりがない。何故なら、言語を学ぶ子供は皆、その言語において考えはじめる、という仕方ではしか言語を学ばないからである。彼は突然、その言語で考えはじめる、一私の言わんとするのは、子供が既に、いわば諒解のために使用しているものの未だ言語で考えていない、という前段階は存在しない、ということである。

普通の人間の思考が営まれるのは、確かに、そこにおいては本来の言語的シンボルはもしかするとごくわずかの部分しか形づくらないようなシンボルの混合体においてのことである。(同書 p.55-56)」

彼はここで、子どもはことばを学ぶ必要があるが、そのことばで考える必要はないと言えるか、自問している。そして、ことばを使わずに考える状態、イメージの組み合わせで思いを描く状態もあり得るかも知れないとしている。けれども、そのイメージは代用可能なものである。また、言語発生は、何語であっても、事情は変わらない。子どもを取り巻くのが、ドイツ語であっても、フランス語であっても、ことばと人間の関係は変わらない。何語を覚えるにせよ、子どもはそのことばで考えはじめる、という事実は疑えない。しかも、意味はわかるけれども、そのことばで考えない、という段階はない。人は、そのことばで、考えはじめる。ここは、すべての論理の基礎として、確認しておかなければならない。

ウィトゲンシュタインの思考実験は、しばしば、発達心理学的な問題に足を踏み入れる。しかも、それは、人間とことばの位置関係を確認されるために、言い替えれば、論理の足場を固めるために敢えて行われる。学問の領域など意に介さず、思考実験のために、ラディカルに、徹底的に、無数の仮定が考え抜かれるのである。

そしてウィトゲンシュタインは、お互いに「それとわかる」以外に言語を使用することはできないと論じている。

「言語によって明証の可能性の外側に踏み出ことは不可能である。

これらの事柄の説明が可能ということは、常に、他人も私と同じよ

うに言語を使用する、ということに基づいている。もし他人が、私にとっては意義を有しない語の並びが彼にとって意義がある、と主張する時、私は、彼がここで私とは異なった意味で語を使用しているのか、それとも無思想に（思想を全く込めずに）話しているかのいずれかである、と想定することしかできない。（同書 p.57）」

それでも、万人に意味の通らない、空回りする車輪のような、哲学的議論が絶えないのはなぜなのか。

ウィトゲンシュタインは、こう述べている。

「哲学者達はこれまでたえず無意義なことを論じてきたのか、という問に対しては次のように答えてよかろう。即ち、そうではない、ただ彼らは一つの語を全く異った種々の意味で使用していることに気付いていないだけである、と。この意味で、ある物はもう一つの物と同じ程度に同じ程度に同一である、と語ることは無条件に無意義、という訳ではない。というのも確信を持ってこのことを語る人は、その瞬間に「同一」という語で何事か（もしかすると「大きい」ということか）を言わんとしているからである。しかし彼はその折にこの語を $2+2=4$ の場合とは異った意味で使用していることを知らないのである。（同書 p.58）」

ウィトゲンシュタインは、神はいるか、とか幸せとは何かというような議論の内容には立ち入らない。そうではなくて、哲学の混乱は、ことばのやりとりの行き違いに由来することを指摘する。ことばを、相手が矛盾なく「それとわかる」ようにやりとりする。これこそ、ウィトゲンシュタインが今後取り組むことになる「ことば考」の根幹であった。そのことに、ウィトゲンシュタインは次第に目覚めてゆく。

また、ウィトゲンシュタインは、感覚はどこまで会話や読み書きで伝えられるか、という問題に、既に深い関心を寄せている。これは『探究』で痛みは他人にどこまで伝わるか、という形で問い直されている。

「38 我々の日常言語はある特定の色調、例えば私の机の茶色を記述する手段を持たない。従ってこの言語にとってはこの色の像の産出が

不可能である。

ある素材の色がどんなであるべきか、を私が人に伝達したい場合、私は見本を送る。そしてこの見本は明らかに言語に属している。私が語によって呼び起こす色の記憶や表象も、同時に言語に属しているのである。(同書 p.83)」

この時点で彼は、感覚や実感が「論理絵」で写し取れないこと、色見本や実体験を伝達のために必要とすることに気がついていた。ことばを「それとわかる」ように伝えるためには、生活世界で語や文が生かされなければならないことを『哲学的省察』は割り出した。今後の「ことば考」はまさにそこを巡って深まってゆくのである。

2. 哲学的文法（前半）

ウィトゲンシュタインは、今扱った『哲学的省察』を、まとまった本として見ていなかった。それは、彼にとって、哲学の「材料集め」としての意味を持っていた。ここで掘り起こされた「省察」をもとにして、彼は本格的な著作を書こうとしていた。「私の次の本は、哲学的文法という表題になるかもしれない」と1931年6月に彼は書いている。実際に、この『哲学的文法』が書かれたのは、主に1933年だった。

この題の意味する文法は、ふつう「文法学」のように使う意味での「ある言語の文法」ではない。ことばが意味を成すための規則、といった意味で使われている。

前作と比べて、この本は、「ことば考」としての求心力を持っている。後年の発展がなければ、この著作の上巻が、彼の代表作となっていたとしても、不思議ではない。

後年、「探究」で展開される数々の着想が、矢継ぎ早に語られ出すのである。

出だしはこうである。

「1 ある文が「わかる」とか「わからない」ということについて語

ることが、どうしてできるのか。人が理解して、それで初めて文なのではないか。(『哲学的文法』1 山本信 訳 p.39)」

これが本書の中心課題である。ある文が、「それとわかる」のは、どういう条件下で可能なのか、と言い替えてもよい。

「その言葉で君は何を思っているのか。」「その言葉を君は思っているのか。」この前のほうの問は後のほうの問をより詳しく規定したものなのではない。前者は、理解されなかった文にかわる一つの文で答えられる。後者に似ているのは「君は本気でそう思っているのか、それとも冗談なのか」という問である。

「その手つきで君は何を思っているのか。そしてそれは何だ」という場合を、これと比べて見よ。(同書 p.42)」

そのことばで何を思っているのか、という問いには、言い替えや補足でふさわしい答えを与えることができる。そのことばを君は思っているのか、という場合、その文は意味をなしていない、意味をなさないことを冗談で言っているとしか思えない、と伝えている文だ。意味をなさない文は、ことばの適切なやりとりの埒外にある。文章が「それとわかる」のは、その文が意味をなしている時だけだ。そのことをウィトゲンシュタインは確認している。また、ここで、彼は手つきの意味を問題にしているが、これは、次のように問い直されている。

「5 面白いことにわれわれは、身振りがわかるということを、言葉に翻訳することとして説明し、言葉がわかるということを、身振りに翻訳することとして説明したくなるものである。

そして事実われわれは、言葉を身振りによって説明し、身振りを言葉によって説明していよう。

他方、「私はこの身振りがわかる」ということが、「そのテーマがわかる」「私に訴えてくるものがある」といった意味のことがあり、この場合は、私が特定の体験をもってそれについていくということである。(同書 p.45)」

身振りによって、意味がどれほど伝わるのか、という問題は、「彼が痛

い振りをするときと、ほんとうに痛がっているときの区別はできるのだろうか」というような形で、『探究』でも扱われる。その萌芽的なものが、この箇所にもみられる。

ことばの意味が「それとわかる」のは、言語が使用される文脈を理解することだ、という発想も、この著書に見受けられる。

「10 「ある言葉を理解している」ということは、その言葉がいかに使われるかを知っていること、その言葉を適用することができることだと言ってよい。(同書 p.52)」

これは、ことばが生活世界での実践で意味をなすという、彼の後期哲学の重要な転回点を先取りしている。その点でも、『哲学的文法』のなかに記述される彼の発想は、きわめて大きな意義を有している。

あるいは、『哲学的文法』と言うときの文法とは、ことばの意味を「それとわかる」ものとしてやり取りするための規則である。その意味での規則ないしルールを備えたものとして、代表的なのが「ゲーム」であることに、彼は思い至った。

「26 (…) 人があるゲームを理解していることとしるしは何か。彼が規則を暗唱できるのでなければならぬのか。彼はそのゲームをすることができる、すなわち現にやっているということも、ひとつの基準ではないか。その際、規則のことを尋ねられると彼は困ってしまうかもしれないとしても、である。彼がゲームを習得するには、どうしても規則を言ってもらいながらでないとイケないのか。そのゲームが行われているのをただ見ているだけでも習得しないか。その際もちろん彼はときどき「ああそうか、それが規則なのだな」とひとりごとを言うかもしれないし、彼が気づいたままに規則を書きとめておくということもありうるだろう。しかしとにかく、あからさまに規則をもちだすことなしにもゲームの習得はなされる。

(中略)

ただしわれわれは、ゲームを考察するとともに、言語を規則にしたがって行われるゲームという観点から考察する。すなわち、われ

われは言語をいつもそのような所行とくらべてみるのである。(同書 p.75)」

主に、子どもが言語を習得することと類比的に、ゲームの習得が論じられ、言語は規則にしたがって行われるゲームと見做せるという、言語ゲーム理論の発見へ至る。

しかもそのゲームのルールは、明示的にではなく、見様見まねで習得される類いのものである。

「73 われわれがゲームについて語るときなどに、「規則」という語をどう使っているか。それは何との対比においてなのか。一例えば「これこれのことはこの規則から出てくる」と言う。しかしその場合に当の規則を引用し、「規則」という語を避けることもできよう。また「このゲームのすべての規則」について語るのに二つの仕方がある。一つはそれら諸規則を全部かぞえあげることである。(中略)あるいは、そのうちのいくつかの規則は、あたえられた基本規則から一定のやり方で生み出される表現の組として語られることもある。この場合には「規則」という語は、これらの基本規則と操作にあてられるのが適当である。(同書 p.155)」

しかし、規則やゲームは定義に基づいて行われているのではない。それは、実践のなかで、時には意識することなく、実行されているのである。

「それはそうだが、現にわれわれはさまざまなものを「ゲーム」とよび、さまざまなものをそうよばないし、さまざまなものを「規則」とよび、さまざまなものをそうよばないことを、やっているではないか。—しかし、われわれがゲームとよぶすべてのものを、他のすべてのものに対して限界づけることが問題となることは、決してない。(同書 p.155)」

ゲームとよばれるものは厳密には決められていないし、知らないうちにゲームをしていることもある。ゲームとは、暗黙のうちに実践される類いのものを含み、人がそれをゲームだと自覚していない場合も多々ある。ことばの意味を「それとわかる」ようにやり取りすることも、まさにそれと

同じく、ふつうはゲームと自覚されていないゲームの実践なのだ。

「哲学においてもわれわれは、生活や科学において語ること以上に大きな普遍性に達することはできない。ここでも（数学と同様）われわれはすべてのことを、それがあままにしておく。

私が言語（語や文など）について語るとき、私は日常の言語を話さざるをえない。この言語は、われわれが述べようとするのがらにとつて、あまりに粗雑で、物質的にすぎるでもあろうか（…）。（同書 p.162）」

彼の「ことば考」は、どこかに哲学が想定する純粹言語ではなく、日常言語の使用の規則、ないしゲームの実践の場において考え抜かれることになる。

次に、ゲームの規則とのかかわりで、彼がこの本で問題にしている、「文が意味をなす、あるいはなさない」とはどういうことか、彼の記述を見て行こう。

「81 語のかくかくの組合せは意味をなさぬという形の諸規則は、将棋における例えば同じ目のなかに二つの駒があったり、二つの目の境界線の上に駒があったりしてはならないという規約と、くらべられてよい。これらの文はさらに、ある種の行動、例えば格子模様の大きな紙から将棋盤を切りとる場合のような行動に、似たところがある。これらはすべて、境界線を引くということなのである。

「語のこの組合せは意味をもたない」と言うことは、いかなることなのか。名前（すなわち一つの音列）についてであれば、「この名前を私は誰にもつけたことがない」と言いうる。そして名前をつけるということは、特定の行動（名札をかけること）である。ある探検家の旅行の道筋を、地球の両半球の射影図の上に線を引いて描写する場合のことを考えてみよう。この図面上で射影図の限界の円周からはみ出た線があれば、それはこの描写の仕方においては無意味だといいうる。このことを、また、それについては何も協定されていなかった、と表現することもできよう。

「言葉をいつも有意味に使うために、私はそうやっているか。いつも文法を参照するのか。いや、私がすることといえば、何かを考えることであって、私が考えるものが私をして無意味なことを言わないようにさせる。」(同書 p.168-169)」

チェスの規則の一つに、決められた境界線を出ない、というのがあるだろう。無意味なことを言わない、というのはこの「境界線を出ない」ことに当たる。意味をなさない珍奇な名前で物を呼ばない。決められた語と文の境界線からはみ出さない。そのことで、「無意味なことを言わない」のは成り立つ。その場合、ことばの規則表を絶えず参照にするのではなく、境界を出ないように、言葉を選んで話せばよい。『哲学的文法』1では、「規則」という考えを手がかりとして、言語をゲームと見做す後期理論へ踏み出している。

3. 哲学的文法 (後半)

ここで扱う『哲学的文法』2は「論理学と数学について」と題されている。純粹に数学的な問題には、専門の知識を要するので、私は、ことばのゲームの規則にかかわる論理的な議論を追うことにする。

「「輪の中のどこでも君が当てれば、君の勝ちだ」「君は輪の中のどこかを当てるだろうと思うよ。」

最初の命題にかんしては、次のように尋ねることができよう。君は何によってそれを知っているのか。君はすべての可能な場所を検討したのか？ そしてこういう答えが戻るにちがいない。それは命題ではないのだ。それは一般的な制定なのだ。

その推論はまた、次のごときものではない。「弾が的のどこを射抜いても、君の勝ちだ。君は的のそこを射抜いた。だから君の勝ちだ。」では、この、そことはどこか？ 着弾が指示する以外、それはどのようにして指示されるのか。例えば、輪によってか？ その輪も、すで

に以前からの的の上にあったのか？ そうでないなら、的は変わってしまったわけだ。だが仮に輪がすでにその場所にあったとするなら、それは的中の一可能性として予見されていたであろう。むしろ、次のように言うべきなのだ。「君は的に当てた。だから…(君の勝ちだ—引用者)」。

的の上のその場所は、必ずしも輪といった表示によつて的の上に記される必要はなかった。とにかく、「中心点にいつそう近づいて」とか「へりのそばで」とか「右上に」といった記述もあるのだから。的のどこに当たったとしても、そのような記述はつねに可能であるにちがいない。(もっとも、かかる記述が「無限に多く」あるわけではない。)

では、「しかし的に当たれば、それはどのどこかに当たっているはずだ」と言うことに意味はあるか？ あるいはまた、「面のどこに当たっても、そのことで—『予想しなかった、こんな場所があるとは知らなかった』といった具合に—驚くことはないであろう」ということはどうか？ つまりそれは幾何学で出会うたぐいの驚きではありえない、ということだ。(『哲学的文法』2 坂井秀寿訳 p.23-24)」

ここでもウィトゲンシュタインは、ゲームのルールを問題にしている。そして、それは、「命題」ではなく、「制定」すなわち約束事であると指摘している。言語ゲームは、論理的にも、矛盾なく通常、進行する。けれども、そこで予想外の驚きが生じたとしても、それはことばの心理学であつて、幾何学的な帰結ではない。

また、彼は、言語ゲームと一般性について論じている。

「もしも間違いでなければ、「単色」という概念は存在しない。「Aの色は単色だ」という命題はたんに「Aは赤か黄か青か緑かだ」ということなのだ。「この帽子はAかBかCのものだ」は、たとえば実際にはA、B、Cだけしか部屋にいなかったとしても、「この帽子は部屋にいる誰かのものだ」と同じ命題ではない。部屋にはその三人し

かない、という事実を最初に言いそえておかなければならないからである。—「この面の上には、二つの単色がある」とは、赤と青があるか、赤と緑があるか…等ということなのだ。

さて私が「四つの単色がある」と言えないにしても、その単色と四とはなんらかの仕方で結びついていたのだし、そのことはまた、なんらかの仕方で表現されるにちがいない。—私が、「この面の上には四つの色が見える。黄、青、赤、緑だ」と言うときのように。（同書 p.47）」

日常言語に、状況の補足なしに、一般化したことばを用いることはできない。一般性は、そのままでは余りに多義的で、意味を「それとわかる」ように手渡すのにふさわしくない。用例から離れて、「すべて」をひとくくりにしてしまうのは、日常言語のゲームをはみだしてしまうのである。続けて、具体例による「概念」の説明について見ていくことにする。

「植物の概念の説明を想像しよう。われわれは誰かにいくつかの対象を示し、それが植物だと言う。すると彼も、またそれ以外の対象を示して、「それも植物か」と言う。そしてわれわれは「そうだよ、それもだ」と答える、等々。さて私はいずれそのうち、次のように言うことだろう。いまや君は、指示されたものの中に、「植物」という概念—ある共通なもの—を見た。そして、君がその説明の実例の中にまさにこの概念を見るとき、君はその実例を、特定の形や色の代表者としてのみ見るときとは別の仕方で見ているのだ。（中略）しかしその中に見るという発想は、例えば私が図|||を異った仕方で分けられたものと見るような場合に由来する。だがそのとき、私はまさに別の意味で、げんにちがった図を見ているのであり、それらの図おのおのに共通する点は、それらの類似性を別とすれば、同じ物理的像によって引きおこされている、ということなのだ。（同書 p.49）」

この説明は、中世の普遍論争を思い起こさせる、個物と普遍の関係を問題にしている。彼は、この古くからの問題を、「植物」というとらえ方を知らない人物に、個々の花や草を指して、これも植物だ、と教えるような

場合を想定して論じている。そして、「植物」というとらえ方を知った人物は、それまでとは違った仕方で、個々の花や草を見ることになる。この「見え方」の変貌を、後の彼なら「アスペクトのひらめき」と呼ぶだろう。

「しかしこの図の説明は、直ちに、変数の理解とか「植物」の概念に対する実例とかの場合に転用するわけには行かない。というのは、仮にわれわれがそれらの実例の中に、もっぱらそのものとして指示された植物におけるとは別の何かを、本当に見たなら、つぎの間が生ずるからである。われわれがこの像あるいは何か他の像を利用することができるのは、それを変数と見なすからなのか？ もしそうなら、私は誰かに説明のために植物を指示し、その際彼に秘薬を授け、その結果彼は実例を特定の仕方で見るようになる、このように仕向けることができるであろう。（中略）そこで当の概念の説明は一義的に与えられ、それを理解した人は目の前に置かれた見本と、伴う身振りとかからこの像を受け取ったことになる。しかし実際はそういうものではない。一すなわち例えば記号|||||を「6」を表わす数字と見る人は、それをもっぱら「幾つか」を表わす記号として理解する人とは、違った仕方で見る（その中に違ったものを見る）。彼は自分の注意を、違ったものに向けることになるのだから。だがそうすると、これらの記号に妥当する規則の体系が問題となり、理解の本質は、特定の仕方で記号を見ることではなくなる。（同書 p.50）」

「植物」の概念の問題を足掛かりとして、花や草の「見え方」の移行は、アスペクトの移行を伴う、ゲームの一例と見做すことができるようになった。

「それゆえ、「いまや私はそれをバラとして見ることをやめ、植物として見るのだ！」と言うことが可能となるだろう。

あるいは「いまや私はこれをバラ一般として見、このバラとして見ることをやめた。」

「私はそのしみが四角の中にあることをもっぱら見る。しかし、それを特定の位置にあるものとして見ることをやめた。」（同書 p.50）」

個物と普遍の古くからの問題が、言語ゲームにおける「見え方」の問題として理解されることが、ここで明確になる。

「[彼はわれわれにいくつかの例を示すことにより、そこにある共通なものを見、その他の物を無視するように仕向ける]と私が言うとき、それは、本当は、その他のものが背景に退き、いわば色褪せ（それにしてもなぜ、まったく消え失せないのだろうか）、そして「共通なもの」例えば卵形だけが前景に残る、ということなのだ。

しかしそれは誤りである。背景を無視すれば、それらのいくつかの実例はたんに技術的な補助手段にすぎなくなり、もし私が一度でも望みのものを見たならば、私はそれを一つの例でも見ることもできることになるだろう（同書 p.52）。」

「見え方」が変わることが、カメラのクローズ・アップのように、単に焦点を絞って風景を際立たせるものであるとすれば、それは言語ゲームではなく、物理的な切抜きに過ぎなくなる。だが、ある花を「植物」と見ることは、ゲームの用例によって、ある花の意味が変わることを指す。

最後に、算術といわゆるゲームの関係についての彼の意見をみて行こう。

「算術とはゲームではないところのものなのだ。人間が遊ぶゲームのなかに算術を加えようなどとは、誰も考えつかなかった。

それなら、ゲームにおける勝ち負け（あるいは「神経衰弱」の成功）は何によって決まるのか。もちろん（例えば）価値をもたらすゲームの状況によって決まるのではない。誰が勝つかは、特別の規則によって確定されていなければならない。

それでは、「最初に自分の石を敵の陣地に置くひとが勝つ」という規則は、何ごとかを確定しているのか？ それはどのようにして正當化されるのか？ 誰かが勝ったことを私はどのようにして知るのか。例えば彼が喜ぶことによってか？

それでもこの規則は次のことを語っている。君は君の石をできるだけ早く…しなくてはだめだ、等。この形の規則は、すでにゲームを生活と結びつける。(中略)

ゲームでは「真」「偽」は無いが、それに反し算術では「勝ち」「負け」が無い。私はそう言いたい。(同書 p.83-84)」

算術は、ゲームではない。ゲームの規則は、ゲームを生活と結びつける。ウィトゲンシュタインは、規則を考えるために、梯子として数学を使った。結局のところ、ゲームはゆるやかな規則を伴う生活の慣例であり、日常言語も、その視点から見ていかなければならない。

4. 青色本と茶色本

いわゆるウィトゲンシュタインの『青色本』は、彼の講義の筆記ノートでできている。それは、出版される予定はなく、彼と学生のための「覚え書き」として作成されたものだった。その内容は、ことばの意味を、独りよがりではなく、相手が誤解なく「それとわかる」ように手渡すとは、どうすればできるか、を巡って語られている。当然、この時期の彼の念頭にあった、ことばは、具体的な用例として、はじめて意味を持つことが検討の対象となっている。

まず彼はこう切り出す。

「語の意味とは何か。

この問題に迫るためにまず、語の意味の説明とはどのようなものかを問うてみよう。

こう問うことは、「長さはどうして測るのか」を問うことが、「長さとは何か」という問題に役立つのと同じ仕方で役立つ。

「長さとは何か」「意味とは何か」「数1とは何か」等々。こういった問は我々に知的けいれんを起こさせる。それに答えて何かを指ささねばならないのに、何も指さすことができないと感じるのだ。(哲学的困惑の大きな源の一つ、名詞があれば、それに対応する何かのもの

を見付けねばこまるという考えに迫られるのだ。)(『青色本』大森莊蔵訳 p.21)」

この最後のかっこの部分、名詞に現実が対応するはずだ、という思い込みは、今までの哲学を、アウグスティヌスを初め、支配していた。そして、彼自身の『論考』の写像理論の前提でもあった。この思い込みに、疑問を投げかける、ラディカルな探究に、彼は乗り出そうとしている。

「[意味の説明とは何か]の間からはじめることには利点が二つある。[一つは]ある意味で「意味とは何か」の問題を地上におろすことになる。「意味」の意味を了解するためには、「意味の説明」の意味を了解しておらねばならないことはもちろんのことだからである。簡単に言えば、「どういう説明であろうとその説明されることが意味なのだから、意味の説明とは何かを考えようじゃないか」ということ。[利点の二は]「意味の説明」という言語表現の文法を調べれば、「意味」という語の文法についても何かが明らかになり、「意味」と呼べそうな何かの対象を探す誘惑から君を解放してくれるだろう。(同書 p.21-22)」

意味を意味であらしめているものは何かを検討すれば、「語にはそれに相当する対象がある」という命名語観の外に出るかもしれない、と彼は言うのである。

そして、この命名語観から外に出るのは、「語の意味は実際の使用によって決まってくる」という考え方だと彼は言うのである。

「しかし、記号の生命であるものを名指せと言われれば、それは記号の使用 (use) であると言うべきであろう。(同書 p.27)」

語の用例の具体例として、彼は次の場合を挙げる。

「私が誰かに「黄色」という語の用法を教えるのに、黄色の切れを指してその語を発音することを繰返すとする。その後ある機会に、彼に「この袋から黄色いボールをえらび出せ」という命令を与えて、習得したことを実地に適用させてみる。その命令を彼が果たした際に起きたことは何であつたらう。「恐らく次のことだけである。彼は私

の言葉を聞いた、そして袋から黄色のボールを取り出した」(同書 p.37)」

語の意味は、このように用法のなかで決まってくる。このようなゲームの用例は、「家族的類似性」を持っている、ということは言えそうだ。

「さまざまなゲームは一つの家族を形成しているのであり、その家族のメンバー達に家族的類似性 (family likeness) があるのである。(同書 p.46)」

この家族的類似性を、一般性と考える所に、今までの哲学の誤りがある。語は、一般化ではなく、生活の中での用例のなかで、その都度の意味が決まっているのである。

誰かが彼をウィトゲンシュタインとして特定する場合を考えてみよう。

「私は原則として私の外見によって認知される。私の体の外見が変るとしてもその変化はゆるやかで比較的僅かなものである。私の声、私特有の習慣、等もまたゆっくりと狭い範囲でしか変化しない。こういう事実によってのみ、我々は個人名を今現に使っている仕方を使うようになったのである。(同書 p.112)」

意味は定義ではなく、家族的類似性を伴った、ことばの使用の実践によって、その都度決まってくる。これが、『青色本』の議論の帰結であり、『探究』につながる「ことば観」である。

続いて、『茶色本』の説明に入ろう。この本も、ウィトゲンシュタインの講義の聴講生による筆記ノートから作成されている。ウィトゲンシュタインはそれを出版する気でいたが、結局、出版は彼の意志で取り止められた。

この一連の講義は、言語をゲームとしてとらえ直すための、思考実験録だと言える。その実験を、ある時は数学的に、ある時は仮説を用いて行っている。

例えば、次のような思考実験である。

「(44) 何かの目的で或る種の器具または道具が使われるのを想像する。それは木片の運動を案内する溝のある盤である。この道具を使う

人はその溝に沿って木片をすべらせる。真直ぐな溝、円形の溝、楕円形の溝、等のある盤がある。この道具を使う人達の言語には、木片を溝の中で動かす動作を描写する表現がある。円形に動かす、真直ぐに動かす、等と言われるのである。また使用される盤を描写する手段もある。その描写は、「これは木片が円形に動かされることのできる盤である」、という形でなされる。この場合の「できる」という語は、動作を描写する表現形式を道具の描写に変換する演算子だとも言えよう。

(45) 或る人々の言語には、「その本は引き出しにある」、とか「水がコップに入っている」、といった文形がなく、我々がこういう文形をつかうときはいつでも「その本はその引き出しから取り出すことができる」「水をそのコップから取り出すことができる」、と言うものと想像してみよう。

(46) 或る部族の男の作業の一つは棒の固さを調べることである。彼らはそれを調べるのに手で棒を曲げてする。彼らの言語には、この棒は簡単に曲げられる」とか「この棒はうんと気ばれば曲げられる」、といった形の表現がある。(中略) 彼等は「この小屋は簡単に曲げられる棒で作られている」、といった文を使うのである。(『茶色本』大森莊蔵訳 p.167-168)」

可能を表わすこれらのケースには大きな違いがある。第1例では描写される状態を実際見ている。第2例でも、箱の中の物やコップの中の水は見えて確認できる。けれども、棒を描写する第3例の場合には、見ただけではどれだけ曲がるかわからず、経験的なテストを元にして、文が成り立っている。これらの思考実験で彼は、「できる」ということばの用法を、具体例を用いて確かめている。

また、彼は、一般的な共通点というものは、日常的な言語ゲームには適切な意味を持たず、正確に言えば、共通点ではなく、類似性があるというべきだと指摘している。

「それならなぜ君は経験に共通する何かがあると言ったのか。[君の]その言い方では、我々が本来的な意味で二つの経験に共通したものとあると言う場合に（例えば、ある種の喜びと恐怖の経験には心臓のときめきが共通している、というような場合に）この場合をなぞらせることになるのではないか。だが君がこの二つの経験に共通する何かがあると言うのは、[実は]ただそれらが互いに類似している、ということを用いた言葉で言っただけだろう。そうならば、その類似性とは或る共通な要素があることだと言うのは何の説明にもならない。（同書 p.213）」

彼は、『青色本』でも、事例を安易に一般化するのではなく、そこには「家族的類似性」があるにとらえるべきだ、と主張している。これは、個別の事例を一般化することが、これまでの哲学の思考の陥る誤りであったからである。

そして、彼は、文の理解と音楽の曲の理解は似ている、と言う。

「なぜなら、文を理解するとは[曲の場合と同様]その文の外にある現実に目を向けることだからである。（同書 p.267）」

文の意味を理解するとは、文の周りの現実に目を向けること、すなわち、生活の中での文脈を考慮することだと言える。

『茶色本』は、思いつく言語ゲームを平板に列挙して行くスタイルを取り、その哲学的な主旨は何なのかを明確に示すことができなかった。そこで、ことばの意味は具体的な用例で決まる、とかことばのやりとりはゲームである、とか、安易な一般化ではなく、用例に家族的類似性を見るのに留めるべきだ、という点や文の理解は生活の中での文脈を考慮すべきだ、という『探究』を支える重要な論点を豊富に含みながら、それを著作としてつなげることができずに終わった。

私たちのこの論文の論点を整理してみよう。

『哲学的考察』では、『論考』の再検討を行い、写像理論の想定する「論理絵」で写し取れない、感覚や実感があることを認め、生活世界の中に、

ことばの意味があると思うに至る。

『哲学的文法』では、ことばとはゲームだと見做すことができ、慣例による規則を伴う生活様式として、ことばを見る視点が深まった。

さらに、『青色本』では、ことばの意味は定義で成り立つのではなく、家族的類似でくくられる、ことばの使用の実践によってその都度、決まってくることを割り出した。

そして、『茶色本』では、具体的な言語ゲームの思考実験を列挙しながら、「文を理解するとは、文の周りの現実を目を向けること」だとする、現実の文脈で意味が割り出されるという視座に至った。

これらをたどることで、『論考』から『探究』へとどのような過程を経て、「ことば考」が深められてきたのかを、実際に確かめることができた。これらのすべての草稿を併せて考えると、「ことばの使用は多様な言語ゲームであり、生活様式であって、ことばの用例は家族的な類似でくくられるが、このゲームは定義に基づかず、根拠によらない慣例で成り立っている」という哲学史上の大転回、『哲学探究』が生まれた秘密に、実態として迫ることができる、と言える。

引用文献

- 『ウィトゲンシュタイン全集 2 哲学的考察』奥雅博訳 大修館書店 1978
『ウィトゲンシュタイン全集 3 哲学的文法-1』山本信訳 大修館書店 1975
『ウィトゲンシュタイン全集 4 哲学的文法-2』坂井秀寿訳 大修館書店 1976
『ウィトゲンシュタイン全集 6 青色本・茶色本他』大森莊蔵・杖下隆英 訳 大修館書店 1975

参考文献

- 『ウィトゲンシュタイン全集 1 論理哲学論考（論考）他』奥雅博 訳 大修館書店 1975
『ウィトゲンシュタイン全集 8 哲学探究（探究）』藤本隆志 訳 大修館書店 1976
『ラスト・ライティングス』ウィトゲンシュタイン 古田徹也 訳 講談社 2016
『ウィトゲンシュタイン『秘密の日記』第一次世界大戦と『論理哲学論考』』ウィトゲンシュタイン 丸山空大 訳 星川啓慈・石神郁馬 解説 春秋社 2016
『復刻版 トルストイ聖書』トルストイ 原久一郎 訳 たにぐち書店 2016
『ウィトゲンシュタインはこう考えた』鬼界彰夫 講談社 2003
『はじめてのウィトゲンシュタイン』古田徹也 NHK出版 2020